各イベントなどの開催状況については、担当課・主催者などへ問い合わせてください。

いずみさの昔と今 第292回

「歴史館に寄贈された資料①～米作りに欠かせない農具～」

4月18日㈯より、平成28年度～令和元年度に寄贈された資料を中心とした春季企画展「新規収蔵資料展」を開催します。春季企画展に関連して、令和元年度に新たに寄贈を受けた資料について紹介したいと思います。歴史館いずみさのは平成8（1996）年に開館して以降、現在に至るまでに農具や民具、古文書など数多くの資料を寄贈していただきました。泉佐野は農業が盛んであることから、近代の貴重な農具を寄贈していただくことが多く、その中でも米作りには欠かせない「馬鍬（まぐわ・まんが）」と「唐箕（とうみ）」を紹介したいと思います。

「馬鍬」は水を張った田の土の塊を砕き、かき混ぜて田の表面を平らにする「代掻（しろか）き」という作業に主に使用されます。代掻きは肥料と土をよく混ぜ、苗の根付けと発育を良くし、雑草・害虫などの除去を助けるなど、稲作には欠かせない工程です。現在はトラクターなど機械化されていますが、「馬鍬」の文字通り、馬や牛に引かせたり、「振馬鍬（ふりまぐわ）」や「手馬鍬（てまんが）」を使用して人の手で行うこともありました。馬鍬を使用する際には、馬や牛の誘導を行う人と、馬鍬を操作する人の2人組で行いました。

「唐箕」は籾や籾殻、ゴミを選別する際に使用される農具です。もともとは「箕（み）」と呼ばれる、竹製や木製の笊のような道具を両手で縁を持ってあおり、風によって軽い籾殻や藁くず、米などを選別していました。この箕の選別作業を機械化したのが唐箕で、選別するものを上部の漏斗（ろうと）部分から入れ、側部に設けられたハンドルを回すことにより中の羽根車が回転し、その風力によって選別をすることができます。この機械化によって、箕よりも少ない労力で一度に大量の選別を行うことができました。この唐箕ですが地域によって様々な変化をしており、上部の漏斗部分の形態や選別するものの落下量を調整する装置、さらには選別されたものが出る樋の部分などに差異があるといわれています。のちに羽根車や歯車の材質の変化にともない、次第に小型化していきました。

以上のような農具のほか、雛人形や火鉢、古文書・古地図から屏風にいたるまで市民の人から数多くの資料を寄贈していただきました。失われつつある資料の収集・保存・公開を当館の役割の一つとしてこれからも果たしていきます。次回も引き続き、歴史館に寄贈された資料を紹介します。市民のみなさんも、気になるモノがありましたら歴史館まで！

▶唐箕（当館蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、祝日（祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

日本遺産・中世日根荘を巡る⑨

～絵図編（8）「八重治池」～

JAPAN HERITAGE
日本遺産

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち ―中世日根荘の風景―」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

◀日根野村絵図に記された「八重池」

現在の八重治池▶

約700年前に日根野村荒野開発絵図に描かれた「八重池」は、現在の八重治池（やえじいけ）と考えられています。天福2（1234）年の「日根荘諸村田畠在家等注文案（九条家文書）」にもその名前が見られ、この池は日根荘荒野開発の原動力になったと思われます。

十二谷池と尼津池とともに、池の貯水は降雨と雨山（熊取町）に繋がる山系・丘陵部の集水に水源を依存していました。当時の日根野村は耕地と集落が東部に偏り、西部に荒野が広がっていましたが、井川（ゆかわ）がつくられる前は、この日根野村東部の田地に、ため池の用水が送られていたと考えられています。後に樫井川の河川より灌漑した水路である井川の開削が行われ、井川以西の下位段丘面の耕地開発が行われました。

※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）